

国際協力事業団

スリ・ランカ国  
灌漑・電力省

スリ・ランカ国  
乾燥地域灌漑農業総合再開発計画調査

農村社会調査報告書

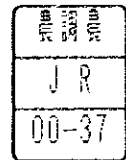
平成12年10月

JICA LIBRARY



J 1160041 (8)

日本工営株式会社



RY







国際協力事業団

スリ・ランカ国  
灌漑・電力省

スリ・ランカ国  
乾燥地域灌漑農業総合再開発計画調査

農村社会調査報告書

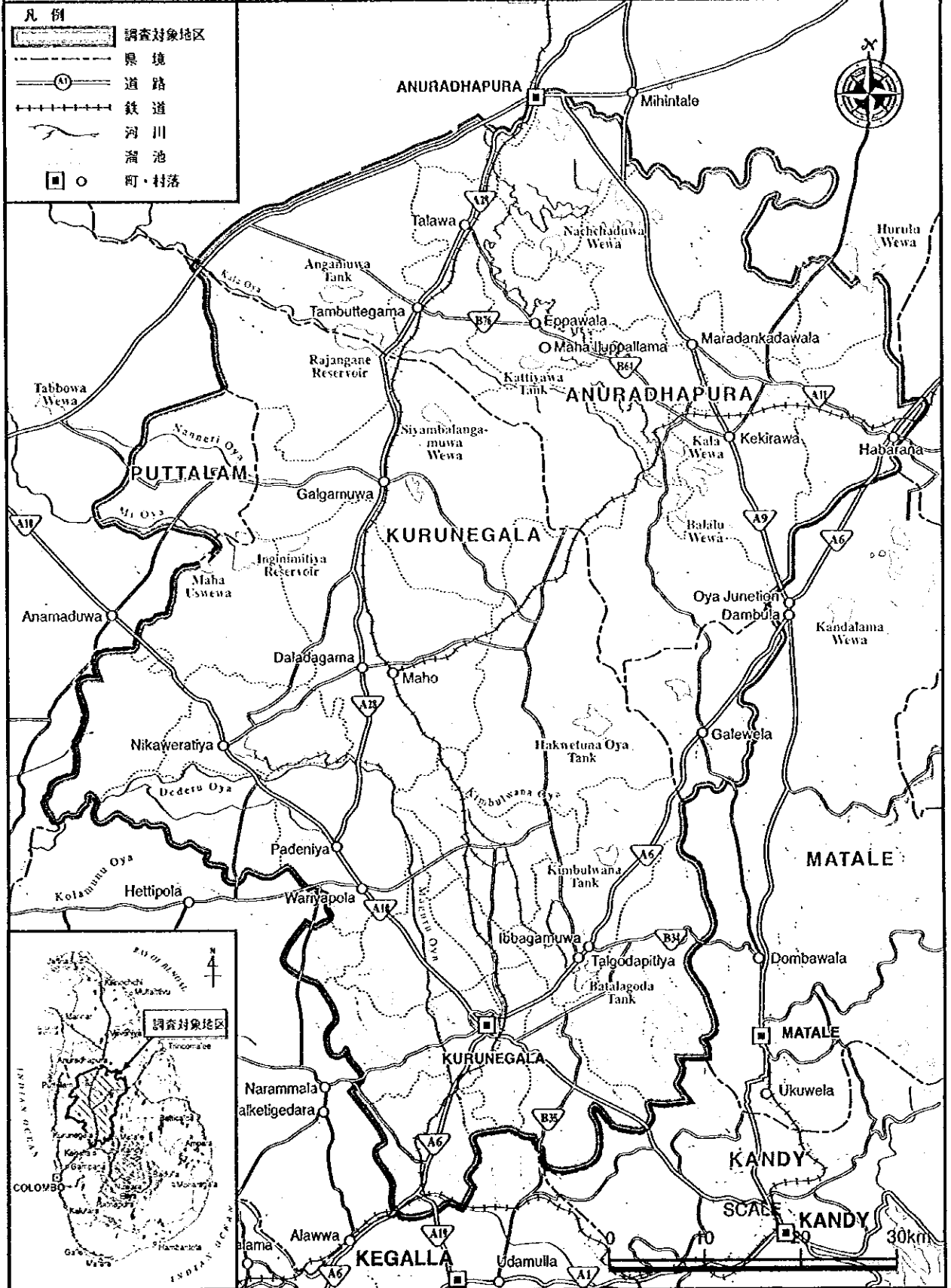
平成12年10月

日本工営株式会社



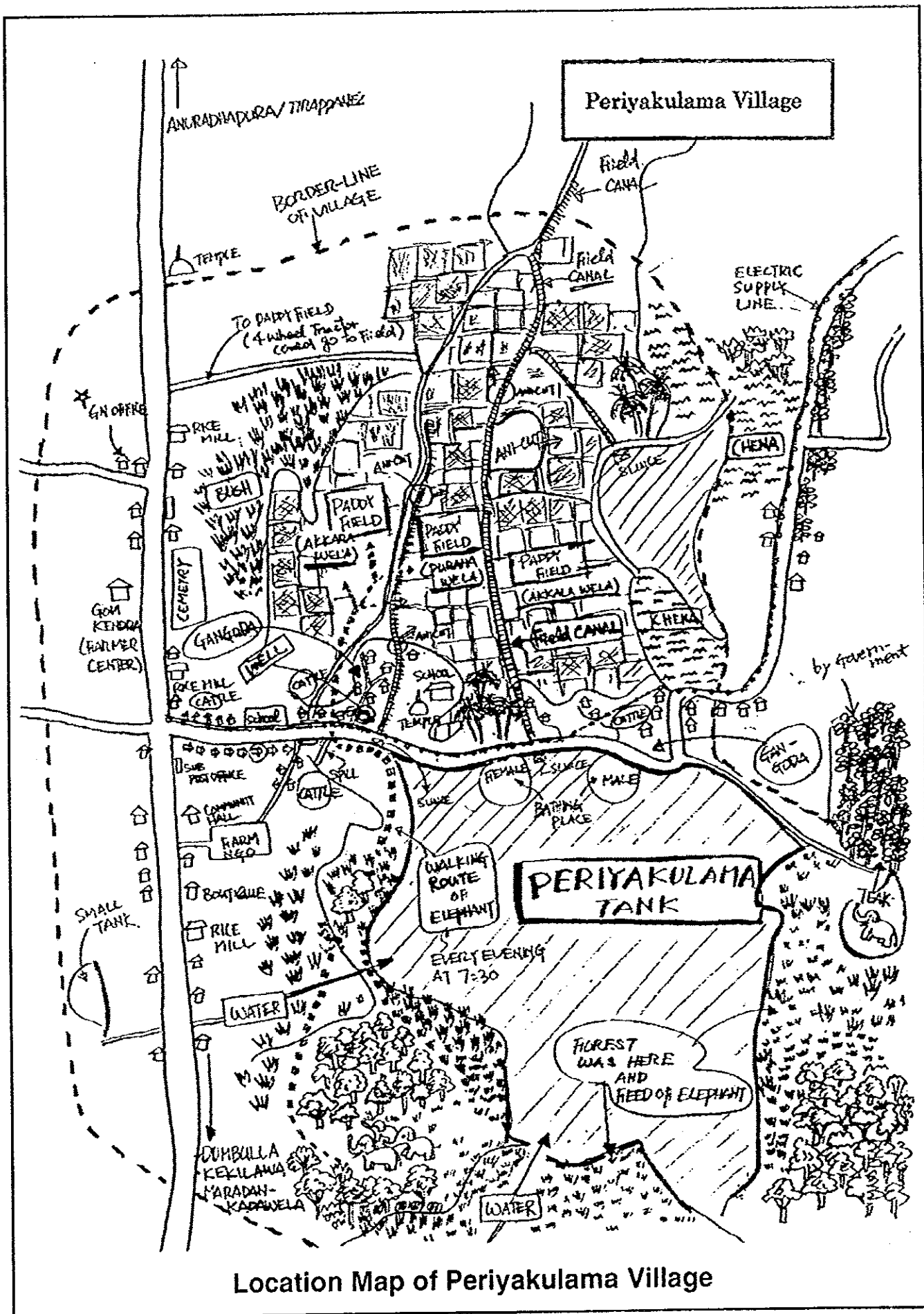
1160041 (8)

# 調査対象地域位置図

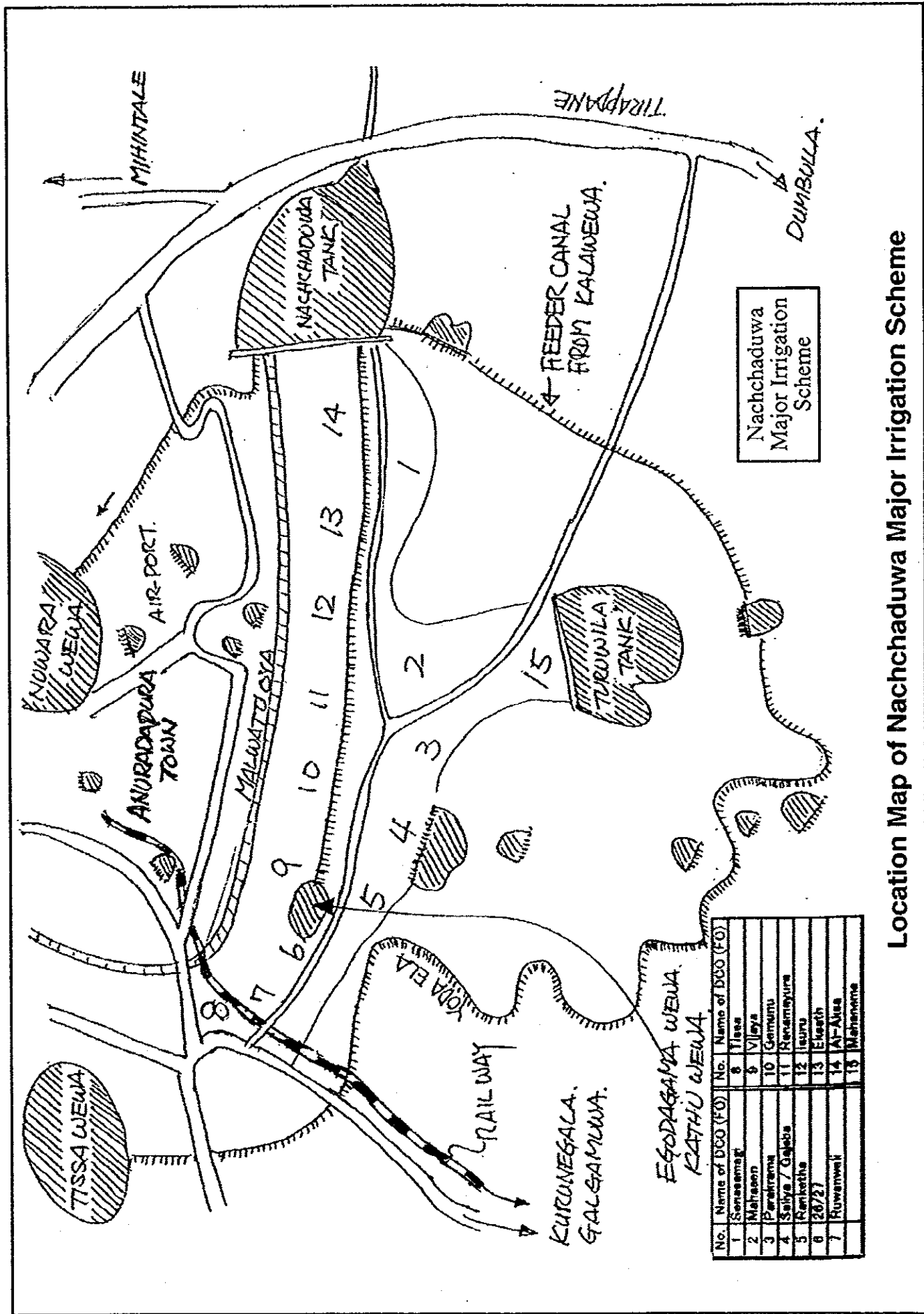


## I. 簡易農村社会調査 (RRA)





Location Map of Periyakulama Village



No.	Name of DCO (FO)	No.	Name of DCO (FO)
1	Seneemagi	8	Tissa
2	Mahasen	9	Vijaya
3	Parakrama	10	Genunu
4	Saliya / Galaha	11	Renamajura
5	Raniketha	12	Ieru
6	20/21	13	Eloath
7	Ruwamweli	14	Ai-Alea
		15	Mahanene

Location Map of Nachchaduwa Major Irrigation Scheme

スリ・ランカ国  
乾燥地域灌漑農業総合再開発計画調査

I. 簡易農村社会調査 (RRA)

目次

	頁
第1章 序論.....	I-1
1.1 調査の背景.....	I-1
1.2 目的.....	I-1
1.3 調査の方法.....	I-1
1.4 調査対象地域の自然条件.....	I-2
1.4.1 北中部州.....	I-2
1.4.2 北西部州.....	I-2
第2章 調査対象村の基礎資料.....	I-3
第3章 アーティクラマ村.....	I-4
3.1 現在の状況.....	I-4
3.1.1 位置.....	I-4
3.1.2 植生と地理.....	I-4
3.1.3 気候.....	I-5
3.1.4 人口、世帯.....	I-5
3.1.5 コミュニケーション方法と交通.....	I-5
3.2 農村地域の社会基盤.....	I-6
3.2.1 道路.....	I-6
3.2.2 飲料水と生活用水.....	I-6
3.2.3 電気事情.....	I-7
3.2.4 教育サービス.....	I-8
3.2.5 医療サービス.....	I-8
3.2.6 その他の施設.....	I-8
3.2.7 灌漑設備.....	I-9
3.3 実施終了及び実施中のプロジェクト.....	I-9
3.3.1 実施終了プロジェクト.....	I-9
3.3.2 実施中のプロジェクト.....	I-10
3.4 村落共同体.....	I-11
3.4.1 村の歴史.....	I-11
3.4.2 閉鎖した経済状態.....	I-11

3.4.3	土地所有	I-11
3.4.4	紛争処理	I-12
3.4.5	住民組織	I-12
3.4.6	宗教・文化活動	I-13
3.4.7	結婚式	I-14
3.5	農業	I-14
3.5.1	農地	I-14
3.5.2	作物栽培	I-14
3.5.3	流通	I-16
3.5.4	クレジット・サービス	I-17
3.5.5	普及サービス	I-17
3.6	農民組合と水管理	I-17
3.6.1	農民組合と水管理の歴史的背景	I-17
3.6.2	カンナ会議でのヤーヤ代表の任名	I-18
3.7	ワークショップ	I-18
3.7.1	問題分析	I-18
3.7.2	優先問題	I-19
3.7.3	ペアワイズ・ランキング	I-19
3.7.4	ペアワイズ・ランキング得点結果	I-20
3.7.5	過去と現在	I-20
第4章	ペーリヤクラマ村	I-22
4.1	自然	I-22
4.1.1	位置	I-22
4.1.2	植生と地形	I-22
4.1.3	気候	I-22
4.2	人口、世帯	I-22
4.3	農村地域の社会基盤	I-23
4.3.1	コミュニケーションと交通	I-23
4.3.2	灌漑施設	I-23
4.3.3	道路	I-23
4.3.4	電気	I-23
4.3.5	給水	I-24
4.3.6	教育サービス	I-24
4.3.7	医療サービス	I-24
4.3.8	その他の施設	I-24
4.4	実施終了及び実施中のプロジェクト	I-25
4.4.1	実施終了プロジェクト	I-25
4.4.2	実施中のプロジェクト	I-25
4.5	村落共同体の現況	I-25

4.5.1	歴史的な背景.....	I-25
4.5.2	文化と行事.....	I-26
4.5.3	伝統的農作業.....	I-26
4.5.4	主な工業.....	I-26
4.5.5	住民の暮らし方.....	I-27
4.5.6	住 宅.....	I-28
4.5.7	村の女性.....	I-28
4.5.8	主な収入源.....	I-28
4.5.9	住民組織.....	I-30
4.6	農 業.....	I-31
4.6.1	農 地.....	I-31
4.6.2	稲作、OFC 栽培及び畜産.....	I-31
4.6.3	農業における問題.....	I-32
第5章 ナツチャドゥワ・大規模灌漑スキーム.....		I-33
5.1	概 略.....	I-33
5.2	自 然.....	I-33
5.2.1	位 置.....	I-33
5.2.2	植生と地理.....	I-33
5.2.3	気 候.....	I-33
5.3	人口、世帯.....	I-33
5.3.1	人 口.....	I-33
5.3.2	世 帯.....	I-33
5.3.3	歴史的な背景.....	I-34
5.4	地域の社会基盤.....	I-34
5.4.1	コミュニケーションと交通機関.....	I-34
5.4.2	電 気.....	I-34
5.4.3	給 水.....	I-35
5.4.4	医療サービス.....	I-35
5.4.5	教育サービス.....	I-35
5.5	村落共同体の現況.....	I-35
5.5.1	農 地.....	I-35
5.5.2	産業と経済活動.....	I-35
5.6	農民組合.....	I-36
5.6.1	歴史と目的.....	I-36
5.6.2	農民組合委員会.....	I-36
5.6.3	プロジェクト管理委員会 (PMC).....	I-37
5.6.4	農民組合連合.....	I-37
5.6.5	カンナ会議.....	I-38
5.6.6	農民組合の抱える問題点.....	I-39

5.7	アル・アクサ農民組合とギャムヌ農民組合の比較	I-39
5.7.1	概 要	I-39
5.7.2	農民組合	I-40
5.7.3	紛争処理	I-40

## 付 表

	頁
表 3.1	ファーマー・アニメーターとのグループ討論の結果 (ファーマー・アニメーターの直面している問題) .....T-1
表 3.2	調査対象地域内アニメーターの種類と主な特徴 .....T-2
表 3.3	各グループより提出された問題－アーティクラマ村 .....T-3
表 3.4	提出された問題の過去と現在に関するグループ討論の結果 －アーティクラマ村 .....T-4
表 5.1	ナッチャドゥア農民組合役員に対するインタビューの結果 .....T-5

# 1. 簡易農村社会調査 (RRA)

## 第1章 序 論

### 1.1 調査の背景

RRA 調査はスリランカ国、乾燥地域灌漑流域社会開発において多く利用されてきている。農民参加型を開発計画のひとつの手法として考えた場合、各農村社会の発展段階、共同体の潜在力、地域住民の将来展望や意向を理解する事は非常に重要である。そして、本計画では、いかに、持続可能な住民主体の開発計画を実行し適応できるかに重点が置かれている。第1段階の調査として、インベントリー調査、聞き取り調査、RRA 調査を平行して行なった。インベントリー調査と聞き取り調査は、農村資源、農家世帯の状態を知る量的な調査であり、RRA は農村地域の情報を収集し、質的な理解を得ることにある。また、農民による、灌漑施設の持続可能な維持管理システムの可能性を確認する事も重要である。

スリランカ乾燥地域の村落社会は長い歴史とともにあり、各村とも歴史と村独自の伝統慣習を有している。このように、修久の歴史を背景に社会環境は形成され、外部者にとって、農民固有の思考を理解しにくいことが多々ある。さらに、現在の農政法等にも耕作者の伝統的な慣習や思考を一部取り入れ作成されていると言う事等から、農村社会の人々から学ぶ姿勢と、その社会を実感する事なしには、持続性のある農村社会開発計画の策定は困難であると思われる。

### 1.2 目 的

調査の目的は、以下のとおりである。

- 地域共同体と大・中・小規模灌漑スキームにおける水管理方法の理解
- 農民組織及び農民共同体の現状と開発の方向性
- 地域共同体の伝統、慣習、問題点の理解
- 法的な整備と制度面での支援体制と農民の実情

RRA 調査には多くの手法があるが、本調査対象地域内の灌漑農村の特殊性、地域性は非常に変化に富むと言う情報を考慮して村落社会の3グループ（農民組合、青年、住民組織と一般住民）に対し、半構造インタビューを100カ所で行った。特に注意しなければならないことは、「プロジェクトによる、共同体の分極化を避ける事」であろう。そして、持続性のある参加型プロジェクトを目指した場合、「継続して共同体を支援する側」（政府関連現場事務所）と“受け手側”の良好な関係が持続する事にあると考える。そこで、RRA 半構造インタビューにおいては、プロジェクトの汎用性を考えるうえで、共同体の定性的な変化や要望（地域内と地域間）に注目した。これに加えて、地域性やモデル性の高いと予測される地域を3ヶ所選び、スリ・ランカを学ぶと言う基本姿勢から、共同体の機微を明らかにし、“受けて側と支援する側”の関係を中心にプロジェクトの実用性について詳細を考察する方法でRRAを行なった。また、農村社会の理解を深め、インベントリー、農家聞き取り調査で収集された資料について、より良い理解と分析、判断を可能とすることも考慮した。

### 1.3 調査の方法

調査方法は以下のとおりである。

- 1) 現場訪問と話し合い
- 2) 農民に関係した法律関係と灌漑用水管理と歴史的な背景等の調査
- 3) 二次的資料の検討
- 4) 半構造アンケート調査と個人面接聞き取り (ナッチャドゥワのみ)
- 5) フォーカスグループとの話し合い
- 6) グループディスカッション・ワークショップ

注) ワークショップはアーティクラマでのみ行なった

## 1.4 調査対象地域の自然条件

### 1.4.1 北中部州

北中部州にはアヌラーダプラとポロンナルワの2県がある。地形は平地で緩やかな起伏をなす。年間降水量は1,150mmから1,800mmで、12月に最も降水量が多い。5月と9月は南西からの乾燥した風により最も乾燥が激しい季節となり、この時期の作物栽培は灌漑水にたよざるを得ない。各月間の平均気温変化は25から29℃である。北中部州の植生は以下の4つに大別される。

- 灌木・常緑林
- 川辺林 (Reveie forest)
- 低地サバンナ
- 湿潤草地

灌木・常緑林は二次林で、伝統的に焼畑が行なわれているところである。川辺林はマハウエリ河灌漑システム水路に沿って樹木林が成育している。この、川辺林は生態学的に多くの利益をもたらしてくれる。それは、野生動物の生息地や餌場、防風、そして川の土手の保護である。魚は川、貯水池、「ウィルス」と呼ぶ沼沢に見ることができる。ウィルスには多くの稚魚が居て、産卵、孵化に絶好の場を提供している。特に、雨季には、多くの種の産卵場所、稚魚の生育地となり、魚の生産性の非常に高い場所である。

乾燥地域の村の貯水池（灌漑システム）は、持続性のある農業を支える上で、非常に重要である。また、これらの貯水池のほとんどが、古代の灌漑施設の特長である、多数のカスケードシステム（連珠池）を形成している。アヌラーダプラ県には約2,500を越える貯水池(Village Tank)がある。(現在、ほとんどの貯水池は池底に泥土が堆積していると言われている) 貯水池の堤体の下方には水のしみ出した沼地のような一角があり、ここを、「カッタカドゥワ」と呼び、水生植物が生育している。ここで水は使用された後、下流へと流れ灌漑用水へと利用される。また、この沼地の目的は生態的に塩分を取り除いているのではないかと考えられている。

### 1.4.2 北西部州

北西部州にはクルネーガラとプッタラムの2つの県があり、面積は両県で7,882.2平方キロメートルで、スリランカ国土の12%を占める。人口は220万人である。州には42の行政区(郡: Divisional Secretariat Division)があり、約5,501の村に459,746世帯がある。このうち、78%の世帯は農村地域にある。調査対象地域はクルネーガラ県北部の16郡とプッタラム県の1郡であるが、半乾燥地域と乾燥地域にあり、アヌラーダプラの自然の特色とほぼ同様である。



## 第2章 調査対象村の基礎資料

村落名 (自然村)	アーツィクラマ	ペーリヤクラマ	ナッチャドウワ
州	北西部	北中部	北中部
県	クルネーガラ	アヌラーダブラ	アヌラーダブラ
郡	ガルガムワ	ティラッパネ	NPE ティラッパネ
農民支援センター管轄地区	マハナンネリヤ	ティラッパネ	ティラッパネ スラワスティブラ
末端行政区 (行政村)	イハラパルカングワ	ワナマルヤナ	16 行政区
貯水池の数	02	01	01
スキームの規模	小規模	中規模	大規模
スキーム/貯水池を管轄する政府機関	農政局	灌漑局	灌漑局 灌漑管理局
村のタイプ	伝統村	伝統村	入植村
世帯数 (戸)	75	152	3,750
農家世帯数 (戸)	75	147	
人口 (人)	425	631	23,750
女 (人)	175	333	12,163
男 (人)	250	301	11,687
家族数 (人)	5.7	4.2	6.3
民族	シンハラ	シンハラ	シンハラ 83% モスリム 15% タミル 2%
宗教	仏教 キリスト教 (4世帯)	仏教	仏教 78% 回教 15% キリスト教 5% ヒンズー教 2%
面積	250 ha		2,706 ha.
水田面積	50 ha.	280 ha.	2,383 ha.
畑地	180 ha.	-	323 ha.
気候区分	乾燥地帯	乾燥地帯	乾燥地帯

### 第3章 アーティクラマ村

#### 3.1 現在の状況

##### 3.1.1 位置

アーティクラマ村はクルネーガラ県の北部県境に位置し、当村までは県庁所在地、クルネーガラから乗用車で約2時間（70Km）を要する。村から最も近い町は、ガルガムワで、村落から約4kmである。また、隣県アヌラダプラの町までは約40Kmである。アーティクラマ村はイハラパルカンドワ行政区（行政村）にあり、イハラパルカンドワ村、アルパタワ村のか3つの自然村から成り立っている。イハラパルカンドワ村は1957年に農民が入植してできた村で、現在85世帯がある。アルパタワ村は40年の歴史のある村で、数名の人々がジャングルに住み始めて出来た村で、現在7世帯が暮らしている。

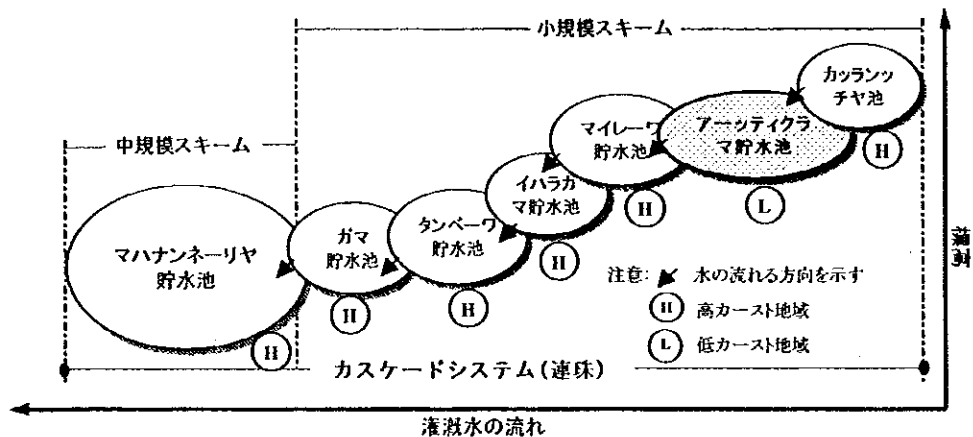
##### 3.1.2 植生と地理

土地は緩やかな起伏があり、降水を集水した貯水池がいくつか連珠的に繋がり、一つの流域（カスケード）を形成している。この村は、このカスケードの最上流から、2番目に位置している。よって、村はカスケード地域の他の村よりは、高い所に位置している（下図参照）。永年作物である、ココナッツやジャック・フルーツは少ない。貯水池と岩山の間には森林があるが、有用な材木用樹木はなかった。この灌木・森林地域では焼畑（Chena）耕作が行なわれているが、この5年間は、耕作が行なわれず雑木林と化し、トゲのある植物「アンダラ」や「カトウピラ」が多く繁っている状態である（写真1参照）。カトウピラはクルネーガラで、キンマ（Beetel Leave）栽培の支柱に重宝がられていて販売する事が可能である。しかし、ここの農民により、有効利用はされていない。



チエナ栽培後、5年経過した地域。繁茂している灌木はアンダラ、カトウピラと言つトゲのある樹種。

マハナンネリヤ地域におけるアーティクラマ貯水池の位置



### 3.1.3 気 候

気候は乾燥地帯の降雨パターンと同じである。モンスーンとモンスーンの間である 10 月から 12 月が最も降雨量があり、ヤラ期の 3 月から 4 月に少量の降雨がある。月の平均気温は 25℃から 29℃である。気候は季節の気圧と季節風、降雨、温度により決定される。クルネーガラ州の乾燥地域における平均的な年間の降雨型は下のとおりである。

モンスーンの種類	期間	降雨量
インターモンスーン	10 月 ~ 12 月	500mm
北東モンスーン	1 月 ~ 3 月	130mm
インターモンスーン	4 月 ~ 5 月	280mm
南西モンスーン	6 月 ~ 9 月	140mm

### 3.1.4 人口、世帯

1994年時のクルネーガラ県の人口は676,208人で人口密度は101人/平方Kmであるのに対し、アーツィク라마村のある、ガルガムワ郡の人口密度は73/平方Kmでクルネーガラ全体と比較して、低い。調査対象村の世帯数は75で人口は425人(女175名、男250名)であった。また、全世帯シンハラ人でほとんどが仏教徒であった。なお、村落外で働いている教家族を除いて、全世帯が農業に従事している。65歳以上の人達が、この村には5名しかいなかったが、これは国レベルの平均余命の数値に比べて低い。

### 3.1.5 コミュニケーション方法と交通

電話、郵便等一般的な通信施設は近くの、ガルガムワ町にある。この町には3つの民間のコミュニケーション・センターがあり、国内/国際電話、ファックス、に複写機等の設備がある。また、国営郵便局もあり手紙は毎日、各戸に配達される。バス停は村から1.5kmのガルガムワ-ブッタラム道路との交差点にある。運行本数は多く、早朝から夜8時頃まで利用できる。また、列車はコロンボ-ジャフナ/トリンコマリー本線がガルガムワの町を横切る形で走っている。一般旅客車、貨物などの利用が可能である。

政府関係機関から村民への伝言や通知は一般に末端行政官 (Grama Niladari) により行なわれる。文書による通知があれば、村落内の雑貨店や茶店の壁やドアに貼られる。そして、文書の内容は店の主人や使用人により買い物客に伝えられ、その村人達が口頭で他の村人に伝えて行く。村落内にはこのような外部からの情報を正式に受け取る手段 - 住民組織宛とか、村代表者宛など - は確立されていない。住民組織のリーダーが、総会などの公布をする時も、同じように伝言を店に貼る。村の中では、葬式互助会 (Maranadara Samithiya) や生活互助会 (Subasadhaka Samithiya) は一般に政府関係機関から村の代表機関として (慣習的に) 認識されているようで、重要な情報は、この機関を利用されることがある。よって、各村のコミュニケーションシステムを知る事はそれぞれの村の現実に近づくために非

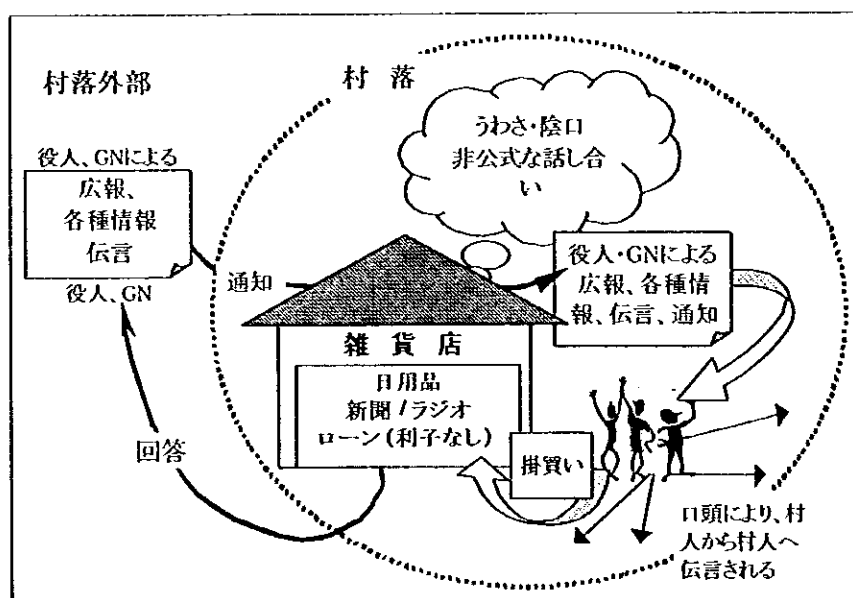


村落内の店

常に有効な手段でもあり、重要である。

また、村落内の店には、一般に新聞が置いてあり、村民は新聞を読むためにもも店を訪れる。店の前には長椅子（縁台状の椅子）が置いてあり、ここに座って雑談をしたり、新聞を読んだりする、コミュニケーションの場所となっている。新聞は店が購入し、来訪者に提供する。アットエキラマの場合、村落内に店が3軒あり、このうち一店が、上述した機能を持っている。また、村民は一般に掛買いを行なっている。そのうえ、耕作期の農業資材購入の為の、ローンも貸し出しているが、利子は取っていない。

このような店に対し、密造酒を販売する店も村落内にあり、男性の飲酒問題を助長している。特に、村落内で雇用労働に携わっている男性は、帰宅途中にこの店に寄り、その日の稼ぎの大半を使ってしまい、家庭が困窮する状況を作り出している。



### 3.2 農村地域の社会基盤

#### 3.2.1 道路

アットエキラマ村落内の幹線道路は舗装されていないが大型トラックが走行できるほどの道路幅があり、舗装されたA-9幹線道路から、隣村へと通じている。バスの運行路線は村から約1.5km離れたガルガムワ-ブクタラム道路で、舗装がしてある。また、貯水池の堤体も水田や水浴び、洗濯に行く道路として利用され、村民にとっては重要なとおりとなっている。

#### 3.2.2 飲料水と生活用水

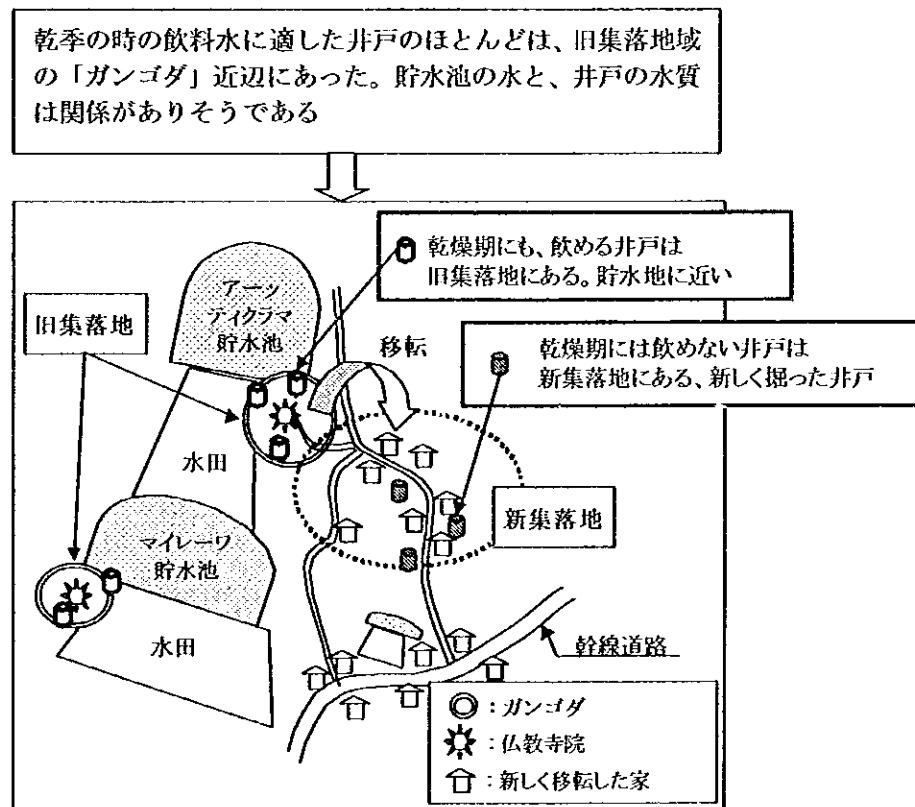
村人は貯水池の水を一般に飲料水以外の家庭用水として、また、水浴び、洗濯用として利用している。しかしながら、村には井戸以外には飲料水供給の施設はない。

ワークショップでは、飲料水不足が選択された。村落内には10個の井戸があり、この内、7戸は個人の所有物で、他の3個は州政府により建設された農業用井戸である。現在、農業用井

戸は作物栽培に活用されておらず、飲料用として使用されていた。乾季には、飲料用として、3個の個人所有井戸と1個の農業用井戸の計4戸しか使用できない。しかし、雨季には問題無く全部の井戸を使用できると言う事である。これは、乾季の水不足と言うことではなく、乾季には水質が低下し、飲料に適さない意味での飲料水不足であった。村人は約20年前までは、乾季には、貯水池の水を、水質が良いと言うことで飲料用に利用していたと言う事である。しかしながら、現在は、貯水池の維持管理を長期間行なわず、水質が悪くなり、飲料水には利用していないとのことである。また、乾期に、飲料水に適した井戸のあるところは、旧集落地 - 「ガンゴダ」で、貯水池に近接した所であった。(下図参照)



水浴、水汲みに貯水池の近くに、



### 3.2.3 電気事情

村落内に電気はなく、ほとんどの村人は明かり用に、灯油のランプを使い、料理には薪を使用している。また、テレビもほとんど持っていない。一方、大規模灌漑スキームの場合、電気のない所でも、蓄電池を用意してテレビを利用している。なお、電気の本線は村から1.5Kmのガルガムワ・プッタラム道路沿いにある。電気を、村に引くには郡庁に申請するか、個人で、工事費用の実費を支払わなければならない。(電柱、ワイヤー、工事費用などの実費)

### 3.2.4 教育サービス

多くの児童はガルガムワ中央学校（小学～高校）にバスで通っている。それ以外の児童は行政村内にある近くのパルカンドゥワ学校（小学～中学）に徒歩、や自転車で、通学している。ガルガムワ中央学校はパルカンドゥワ学校より、大きく、教職員や施設も充実している。そのため、両親はガルガムワ学校への通学を希望している。

数名の子供達が、パルカンドゥワ交差点にある、私立の学校塾へ通っている。ここ数年前から、都市部のほとんどの児童が、学校終業後と休日に、塾に通い始めるようになった。現在、農村部においても同じような現象が波及している。パルカンドゥワの寺が教師に寺の敷地を貸し、塾を運営しており、多くの公立学校の教師が副収入を得るために塾を始めている。また、村落部のほとんどの学校では、放課後に昇級国家試験対策として、上級学年の生徒に補修授業を無料で行なっている。そして、教師の多くは、子供達へ支援することを共同体のメンバーとして誇りにしていた。しかし、塾の進出により村落部の教育事情や教師の道德観も変化して来ているようである。就学前教育施設（幼稚園）は村落内にはなく、仏教寺の住職により行なわれる、子供達のための日曜学校は開催されているが、寺には住職がない状態であった。



寺の敷地に建設された塾

### 3.2.5 医療サービス

村落内には医療施設はない。村民は、ガルガムワ町の公立、私立病院、私立診療所を利用している。村の健康問題は頻繁に発生するウィル性熱病であった。（村民はシンハラ語で単に‘Una’ - 熱と言っていたが、マラリアではない）10年前まではマラリアが最も深刻であった。緊急時以外は、公立病院を利用している。理由は、公立病院の場合、治療費が無料であり、私立は費用の支払を行なわなければならないうえに、高いからである。また、地域内を巡回している、助産婦がいるが、出産前後の婦人へのサービスのほかに、家族計画についてのアドバイスも行なっている。助産婦は自転車で、少なくとも月に1回、妊婦、乳幼児のいる各家庭を訪問している。

### 3.2.6 その他の施設

アーツィク라마は地域の中で、社会的に孤立した村である（貯水池カスケード地域 - 約6個の貯水池が連珠式に繋がっている水利社会）。と言うのは、この村が他の村よりカーストが低く、近隣村との交流がないからである。そのため、多くの村人は近隣の村で用事を済ませる事ができるにもかかわらず、ガルガムワ町で用を済ませている。ガルガムワの町は多くの店があり、シンハラ人より、モムスリム経営者の店が多い。

### 各施設へのアクセス

No	サービス施設	アーティクラマ村内	村外の最も近い施設への距離と地名	
1	雑貨店 (日用品)	3軒		
2	ボラ (定期市場)	なし	4km	ガルガムワ
3	協同組合売店	なし	2.5km	パルカンドゥワ
4	金物屋 (建設用資材等も含む)	なし	4km	ガルガムワ
5	トラクターのレンタル	なし	1km	
6	農業生産資材卸売業者	なし	4km	ガルガムワ
7	精米初	なし	1km	
8	肥料貯蔵倉庫	なし	50km	マホ
9	農薬所蔵倉庫	なし	4km	ガルガムワ
10	警察	なし	4km	ガルガムワ
11	郵便局	なし	4km	ガルガムワ
12	電話・FAX	なし	4km	ガルガムワ
13	バス停	なし	1km	
14	鉄道駅	なし	4km	ガルガムワ
15	診療所	なし	4km	ガルガムワ
16	薬局	なし	4km	ガルガムワ
17	伝統医薬施業所 (アエルヴェーダ)	なし	4km	ガルガムワ
18	セイロン銀行 (公)	なし	4km	ガルガムワ
19	ピーボルズ銀行 (公)	なし	4km	ガルガムワ
20	地域農村銀行 (公)	なし	4km	ガルガムワ
21	サナサ銀行 (民)	なし	4km	ガルガムワ
22	サムルディ貧困対策銀行 (公)	なし	1km	
23	IFAD プロジェクト事務所	なし	4km	ガルガムワ

#### 3.2.7 灌漑設備

アーティクラマ村には2つの貯水池があり、それぞれ、アーティクラマ池、コトウウエワ池である。両貯水池とも他水系からの水路はなく、全て天水に頼っている。また、水路システムもなく、貯水池の取水口から水田へ直接水がかかる。取水口のみがセメントで作られ、取水口ゲートなどの構造物のみを灌漑局が管理する。構造物はほとんど、壊れていた。

### 3.3 実施終了及び実施中のプロジェクト

#### 3.3.1 実施終了プロジェクト

10年前に、「ジャナサヴィヤ」(Janasaviya - 貧困対策事業)プログラムで貯水池の堤体の改修工事が行なわれた。しかし、村民はこの結果に満足ではなかった。

1997年、北西部州参加型農村開発計画で貯水池の改修工事について政府職員が農民組合を訪問した。しかし、農民は政府職員の提案する、計画案や実施方法に同意できず、この計画の実施を断った経緯がある。改修工事に同意できなかった、農民の理由は次のとおりである。

- 貯水池の底に沈殿した泥土の浚渫が優先される事。
- 提案された貯水池の堤体の改修方法は、外部から土砂を搬入して行なうと言うことであったが、これにより、池底への土砂の沈殿が再び、促進されること。
- また、同様な改修工事により土砂の池底への堆積を、ジャナサヴィヤプログラムで経験している。
- 伝統的に、浚渫した泥土は堤体に積むと、同時に堤体を改修していた。

当村における、灌漑施設関係の実施終了した、プログラムはこのジャナサヴィヤによる、堤体の改修工事だけである。現在、以下に述べる2プロジェクトが村落内で進行中である。

### 3.3.2 実施中のプロジェクト

#### (1) 北西部州・参加型農村開発計画 (NWP-PRDP)

NWP-PRDP は国際農業開発基金 (IFAD) が資金を協力し数々の計画が進行している。アーツェイクラマでは、1998年より、カシューナッツ栽培計画が婦人グループを通して進められている。そして、下記のような婦人会が組織された。

ブドゥ開発協会	
開始日	1998年 10月 5日
会員数	17名
貯蓄高 (資金)	900ルピー
活動	カシューナッツ栽培

開始当初、各会員にカシューナッツの管理費用として2,400ルピーが支給された。月例会では会員費5ルピーを徴収している。当会の目的はグループによる貯蓄と自己雇用創出の強化である。

ブドゥ開発協会リーダー		
委員長	チャンダニ・エディリシンハ	38歳
書記	S.H. アヌラワティ	42歳
会計	T.P. レノーラ	32歳

この外に、以下のような活動を関係機関の職員と共に行なっている：①永年作物の栽培 - 12世帯 (ライム、オレンジ、パラミツ、ココナッツ、カシューナッツ)、②ヤギの飼育 - 5頭を7農家に配布、③ 養鶏 - 鶏小屋作成費用250ルピーと雛10羽を10農家に配布。

#### (2) スリ・ランカ、カシューナッツ公社

カシューナッツ公社は1998年から、北西部州参加型農村開発計画とは別に、カシューナッツ開発計画を当村にて開始している。現在、村民33名 (女7名、男26名) が参画しており33エーカーに無料で配布された、1,320本のカシューナッツ栽培を行なっている。カシューナッツの栽植密度は1エーカー当り40本で、栽植後5年で収穫が可能である。

#### カシューナッツとライム：

カシューナッツ栽培は、プッタラム県でさかんに行なわれている。ココナッツの生育の悪いところでは、カシューナッツを始め、ライム、オレンジなどが良く生育する果樹として取り上げられている。カシューナッツ栽培での問題点は、収穫した実を、現在手作業で行なっているが能率が悪く、ナッツが半分に割れ販売価値が下がる事である。また、ライムにおいては、収穫時期が地域一帯で、重なる為、販売価格が暴落してしまう事である。今回の調査期間中はライムの収穫時期であったが、2Kgを20ルピーで直売している農家もあった。一般に、コロombo市内のマーケットでは、一個当り、2ルピーから5ルピーで販売されている。また、ライムの加工品としては塩漬けにした、「ルヌ・デヒ」があるが、これは、現在コロomboでは市場やスーパーマーケットで販売されている。



### 3.4 村落共同体

#### 3.4.1 村の歴史

約5世帯からこのアーツィク라마村は始まったと言われている。40年ほど前には、約15世帯の農家があり、当時は村の貯水池と水田の間に位置する「ガンゴダ」(gangoda)と呼ぶ地域に全世帯が住んでいた。現在、70世帯余りに増え、居住地域はガンゴダから移動し、現在、一世帯のみが暮らしている。貯水池や農業へのアクセスよりは、村落外部へのアクセスが選択されている傾向にある。伝統的な家の作りは、壁は荒打ち漆喰で屋根葺きの材料は稲わらかココナツの葉を編んだものである。最近建設される家は、壁にレンガ、屋根には瓦を使用して、伝統的な家よりは数段大きい家を建てている。ところで、良く、村民が‘パーマネント・ハウス’ (耐久建築家屋) が欲しいと言っているのは、後者の家を意味する。スリ・ランカの農村地域においても、伝統的な多世帯居住がなくなり、核家族化が進み、急速に世帯数が増加している状況にある。

#### カースト:

調査の期間中この村では何か違った雰囲気があった。このため、隣村を訪ね、その理由を探ろうと試みたところ、以下の事が理解できた。

- 村民は洗濯カースト (ラダ/ヘーナヤ) に属している事。一般に名字の ‘ge’ (日本語の ‘の’) はカーストの種類を表す単語の前にくる。例えば、ワークショップに集まった人達のイニシャルがほとんどHであったが、‘Henayalage’であり、洗濯カーストの ‘と言う事で、洗濯屋の家’ からの出身者、つまり、洗濯カーストであることが理解できる。若者の間では、氏名を変更したりイニシャルを省いて、名前を書くようになっている。
- 近隣村との積極的な相互交流はない。
- 婚姻関係は、近隣村とは全くない。

#### 3.4.2 閉鎖した経済状態

わずかに村民の5%が村落外に正規の定職を得ている。(軍隊、公務員) 若い女性は、ガンパハ県内のカトゥナヤケ (国際空港の近く) やピヤガマ (コロンボ市から20Km) の衣料縫製工場に勤務している。平均月収額は約6,000ルピーである。村落内に立派な作りの家があるが、それらのほとんどは、衣料縫製工場に勤めている農民の娘の送金により建てられたものであった。村落内には工場はないが、溶接、左官、大工、敷物織などの技術を有した人材はある。しかし、資金不足や市場へのアクセスなどの問題から、小規模工業的な活動が実行されていない。青年の雇用問題は深刻であり、約50名から60名の失業者が居るようである。また、全世帯の半数以上が「サムルディ - 貧困対策事業」の援助を受けていて、質的な面で村の生活状態は低いと言える。

#### 3.4.3 土地所有

農民組織リーダーからの聞き取りでは、村民個人の土地所有面積は0.25エーカーから2.5

エーカーと大きく差があり、約25%の世帯は土地を持っていないと言うことであった。土地は一般に、親から子へ、性別、年齢序列に関わり無く、等分に分与される。家族が核家族化せず、ひとつの屋根に住んでいる状態では、形式的に土地は遺産相続されるものの、家族でひとつの土地を使用するために、実際には土地の分散は起こっていなかった。現在は、核家族化が進み、土地の分散は見られるが、村人は土地の分与は伝統的慣習により親族間で行なわれてきた結果であり、土地の分散に対しては特に問題としてはいない。ところが、経済的に困難な状態の農民が、最近、隣村-カランディヤ村の農民に水田を販売し、外部の農民が耕作を始めるようになっている。この水田の販売価格は40,000ルピー/エーカーであったが、当村から約1.5kmしか離れていない、パルカンドゥワでは、100,000ルピー/エーカーで、水田は売買されていた。パルカンドゥワは、ガルガムワ-プックラム道路(舗装されたB級幹線道路)に面し、電気があることで、土地の値段が高いと言う、末端行政官の話であった。

**末端行政官 (Grama Niladari) :**

シンハラ語を直訳すると Village Officer となる。1994年までは、Grama Sewaka と言い、直訳すると Village Servant であった。また、地域在住者がこの職に就いていたが、現在は、乾燥地域における暮らしの経験のない他地域の者も採用されたり、転勤できるような法制度に変更されている。末端行政官は現場に駐在する事(夜間も含める)が職務として決められており、紛争処理、村民の諸種行政手続等、世帯人員調査(選挙人名簿作成)等重要な職務を担っている。

### 3.4.4 紛争処理

村で揉め事が起こったとき、互いの関係が深いので(ほとんどが親戚関係にある)、平和的に解決される。例としては非常に少ないが、末端行政官や警察が紛争処理に関与することがある。近年、男性の飲酒(アルコール依存)とこれによる貧困が深刻な問題となっているが、この現状を解決する為に、以前にもまして、女性は男性よりも村落の開発に関して重要な役割を担っているようである。

### 3.4.5 住民組織

村には約5つの住民組織が活動している。住民は農民組合が最も重要だと言っているが、実際、最も活発に、そして、住民の参加率の最も良いのは葬式互助会である。また、ダーヤカ・サバー(Dayaka Sabha - 檀家の会)があり、寺に関係する活動や寺の管理に関する支援活動、ウェサク(Wesak - 5月の満月の日に仏陀の生誕入滅を祝う



葬式互助会の総会風景 - アッティクラマ村

行事) や (Poson poya - 6月の満月の日に仏教伝来を祝う行事) のペラヘラ(perahera - 仏教行事で行なう行列) や子供のための日曜学校(Dahan Pasal - 道徳、宗教について学ぶ) 運営等の世話役を行なっている。IFADのプログラムにより、プブドゥ婦人会が設立されている。

(3.5 (1) 参照)

村落内の住民組織

No	組織名	No	組織名
1	葬式互助会	4	ブブドゥ婦人会
2	仏教檀家の会	5	カシューナッツ栽培者グループ
3	農民組織		

3.4.6 宗教・文化活動

宗教と文化活動は密接な関係にある。この村の寺は 1986 に建立されたが、現在、住職は不在である。一般に寺、貯水池、ガンゴダ (集落地) が乾燥地域における村の基本的な形態であるが、この村には寺が欠けていた。これまでに、1 人の僧侶が住職をしていたが、これに変わる僧侶が見つかっていない。このため、近隣の寺に行き、必用な仏事を行なっている。

この村では、伝統的宗教・文化に関係した祭事等は熱心に行なわれている。これは、主として、神への感謝と村人への加護であり、また、次の年 (季節) の作物や仕事 (経済活動) についての祈願である。

**キリ・アハラ・マンガラヤ**

キリ・アハラ・マンガラヤは貯水池の堰堤のコンと言う樹木の下で、各世帯が収穫した米を持ち寄って、行なわれる。(写真右) 米は搗かれた後、牛と水牛、ココナッツミルクで炊き、ミルクライスを作る。神を静めるために、キンマの葉 (Beetle leaves) とびんろう樹の実 (arecanut)、花、灯明が捧げられ、神への感謝と加護に対して特別な祈りが捧げられる。この時、祈りを捧げる神々は、「ガンバラ神 ( ) Gambhara Deiyo)」、「スニヤン神」 (Sunian Deiyo)、グルマ神 (Guruma Deiyo) である。そして、村人がミルクライスを共に食す。しかしながら、村で互いに憎しんだり、仲違い等をしている住民がいても、これ乗り越えて一同に参集するこのような機会は、他村では非常に少なくなってきた。また、ミルクライスの炊き方は、近隣の村には見られない、この村特有のものであるようだ。



**ヴェディ・カダワラ・デイヨ**

次の行事は、村で牛の飼育者が行なう儀式で、「ヴェディ・カダワラ神」への感謝と加護を祈る。この儀式は、以前、狩猟者によって行なわれていたものであったと言われていた。近隣の村にはこの種の儀式はなく、この村特有のものである。

**デワカツリヤ**

3 番目の儀式は「デワカツリヤ」と言い、伝統的に 3 家族によって行なわれている。「カンピリ神」、「カダワラ神」、「グルマ神」、「バヒラ神」、「ガンバラ神」次の 5 つの神に対して感謝と加護を祈る。神に対し、菓子、果物、キンマの葉、硬貨 (パンドゥル) など

21種の捧げ物をする。

最後の2つの儀式は夜半に行なわれる。この2つの儀式は個々の家族によって進められるが、村の全戸が行なっている。この儀式を行なう事によって、村の調和、協同、同胞愛が醸成されると信じている。

### 3.4.7 結婚式

村で行なわれる結婚式は簡素である。そして、村中の人達が一カ所に集う機会でもある。一般に結婚は、カーストを基本に行なわれる。スリ・ランカの社会では、カースト制度は早くから無くなっていると言われるが、結婚の場合は重要な問題となる。また、時間の吉兆を見る「ナカタ」(Nakat)は、重要で、結婚は男女の星座や時間を見て、これが互いにつりあった時に成立する。特に、この村はカーストが低いため、婚姻先も、地域的に限定されている。

## 3.5 農業

### 3.5.1 農地

村の総面積は250エーカーあり、水田50エーカー、高地(水田以外の土地)は170エーカーである。全ての水田は昔からの私有地で、土地登記の証文もあり、「プラナ・ウエラ」(Purana wel - 古代からの田園/私有水田)に位置している。ここには、「アッカラ・ウエラ」(Akkara wela - 植民地政府が公有地を開墾して造成した村民に売渡した土地)や「バドゥ・イダム」(Badu Idam - 借地)等はない。水田の1世帯あたりの所有面積は0.25エーカーから2.5エーカーと差がある。また、小作人はいないが、「タットゥマール制」(Thattumaru - 2、3年に1度、または、数年に1度の割合で耕作権が回ってくる共同所有田)は親族間で行われている。焼畑農業(Chena)も、小規模ながら行なわれている。

農地の拡大は、これ以上望めない状況に在る。各世帯の敷地はかなりの面積を有するがなにも栽培されていない。

### 3.5.2 作物栽培

#### (1) 稲作

稲栽培面積は約50エーカーで、直播栽培である。収穫量は概して低く、1エーカー当たり60~70ブッシェル位である。品種は3~3.5カ月品種が使用される。播種は、マハ期の10月から11月にかけて行なわれ、収穫は2月頃に行なわれる。ヤラ期は灌漑水不足のため、稲の栽培は行なっていない。貯水池の水量や時期により、ベトマ(Bethma)やキヤクラン(Kyakuran - 乾田直播)が行なわれる。

現在の農民の問題は、野象による作物への被害である。稲初の販売価格は8ルピー/Kgであるが、水不足や野象による食害、低収量、土地の分散化による水田面積の縮小などの諸条件から、販売できる初の量は少なく、初販売による現金収入少なくなっている。以前は、農民が交代で象の見張りをしてきたが、現在は行なっていない。

## (2) その他の栽培作物

稲作以外の作物は、そのほとんどが、マハ期にチェナで栽培されている。この5~7年間は、畑作物及び野菜 (OFC) 栽培は減少している。OFC が栽培されない原因は野象と水不足にあるが、これまで良く、栽培された作目には、しこくびえ、ささげ、緑豆、へびうり、なす、トマト、とうがらし、オクラ、赤たまねぎ等がある。ヤラ期には、ごまや、とうもろこしが栽培されていた。チェナはマハ期に行なわれていたが、現在は人口増加と上述した問題等により栽培が少ない。以上のような理由から、これまで自給していた食料品のほとんどを村落外から購入しなければならない状態にあり、安定した質素な生活は過去のものとなっている。そして、経済的な問題はますます、深刻な不可避な問題となり、生活の質が低下している。なお、今季は、数名の青年が三尺ささげやごま、落花生を敷地内の井戸を利用し OFC 栽培を試みていた。収穫物は通常、ガルガムワの仲買人に販売しているとのことであった。

キャッサバは各家庭が敷地内で栽培している、最も一般的な作物である。しかし、これも象の好物で、象を引き付けてしまうと言う理由から、栽培を行っていない。ツボクサ (gotukola)、セリ科野菜 (mukunuanna)、ヨウサイ (kankun) 等の葉物野菜は貯水池の回りに自然に生育し、自家消費用野菜として農民に利用されている。現在の環境が改善されるとしたら、しこく稗や豆類を主食の補完食料として栽培したい希望を持っている。また、カシューナッツやライムは土地の条件に合うために換金作物として栽培を希望している。ココナッツは地中に白い粘土層 (kiri-mati) があるため、生育は悪いが、ライムやオレンジ、チークはこのような土地で良く生育すると経験的に考えている。実際、この村のココナッツ栽培面積は、貯水池を中心に3エーカーしか栽培されていない。

## (3) 家畜飼育と淡水魚

多くの農民が肉用の牛とヤギを契約ベースで飼養している。牛は、ガルガムワのモスリム商人と肉牛の契約飼育を行なっている。つまり、子牛をローンで購入し、これを肥育し肉牛として同じ商人に販売し、この時ローンの差額分が引かれるシステムである。しかしながら、牛を販売する以前に、ほとんどの農民は、この商人から掛買いをしてしまうので、実質どの位の収益が在ったのかを詳細に語れる農民は居なかった。肉牛1頭は約、6,000ルピーで販売されていた。また、ヤギは生体重で、1kg、80ルピーで取り引きされている。淡水魚養殖は全く行なわれていない。

現時点では、家庭の現金支出を押さえるために、自給用の家庭菜園、放飼に近い産卵鶏の導入を行なったり(コロンボ市内では数軒の有機農業野菜、卵を販売する店があるため、地域で共同出荷の体制ができると販売ルートを確立できる可能性もある)、ヤギ、牛の契約肥育も農民側が組織化する事により、必要生産資材を共同購入し、支出を押さえる形で収益性を高められる、また、象の被害に対しては、夜の見張り当番の復活をする。など



ヤギ小屋は夜間のみ使用される

の現実的な方策を進めながら、経験的に農民自身が学ぶ機会を設け、これを外部機関がサポートする方法が持続的な開発につながるのではないかと考察する。

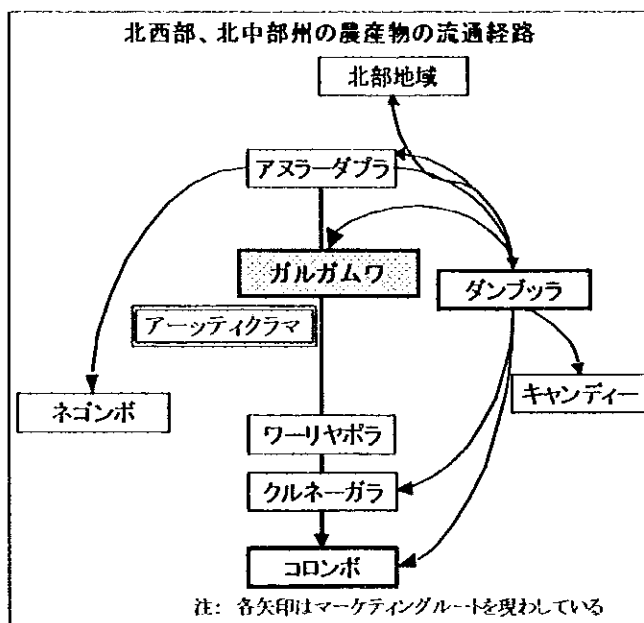
### 3.5.3 流通

#### (1) 農業資材の流通

ほとんどの農民は農業資材をガルガムワの民間業者から購入している。全ての農業資材を必要な時期に購入する事ができ、特に深刻な問題はなかった。しかし、共同購入などの組織的な活動は何も行っていないうえ、農民組織の各種機能や基本的な知識がなく、農民が自発的に行動を起こせないことが最も深刻な問題である。セイロン肥料公社やセイロン石油公社では、農民組合に特別価格で直接販売するシステムを持っているうえ、適切な使用方法のセミナーなどのサービスも行なっている。また、農民支援センターを通して、種籾、肥料、農薬の一括購入が可能である。問題は、これらに関する知識を農民側もフィールド・オフィサー側も熟知していないことである。組合員にこれらの事を聞いて見たが、知らなかったが、非常に興味を持ち、すぐにでも始めたいと言う事であった。

#### (2) 生産物の市場

村落内では非常に限られた市場活動しか行なわれていない。これは、稲作を始め OFC 栽培の生産性が低いため、大手の業者にコンタクトできない。また、一般に、生産物のほとんどは自家消費され、余剰生産があった時のみ、近隣の民間業者に販売をしている。また、当村から最も近いボラ（定期市）は、ガルガムワにあるが、時々この市場に販売しているのみである。村民によれば、生産性を高める事が最も必要な事であり、このためには、水と生産資材の投入についての準備・計画が大事である。と言う。この場合、市場にアクセスできる方策も必要とするであろう。クルネーガラ（ボラ）に来ている業者は、定期的に一定量の農業生産物が、最低、大型トラック一台分、あれば、現地に生産物の引き取りに行けると言うことであった。



ガルガムワ地区及び、近隣のマーケティングルートを示した。ガルガムワ地区はアヌラーダプラからクルネーガラ、コロンボへ向かう一本のマーケティングルートしかない。農産物の流通は、ほとんどがダンブツラを中心に動いていて、アヌラーダプラは集荷地ではなく、ダンブツラから、西海岸のネゴンボ地域へ、また、北部地域への通過点に過ぎず、アヌラーダプラの農産物もダンブツラへ出荷されている。ガルガムワを経由して、アヌラーダプラの業者が、野菜の購入を行なっているが、夜半に、道路上で個人農家から、農産物を購入している状

態で、決まった集荷地点はない。通常、ワーリヤボラの手前で、トラックの積荷は満載となり、期待をして道路脇で待っていた農民が、野菜を売れないという事は多い。このような業者を一定地域に定期的に呼び込めるような対策が望まれる。これもやはり、組織化する方策が一番手っ取り速い手段である。

#### 3.5.4 クレジット・サービス

たった、1人の農民が銀行から耕作用の資金を借りうけていた。他の農民は村落内の店から、資金を借りていたが、店は無利子で、貸し出しを行なっている。しかし、資金を借りうけ、農業資材を購入していた農民は数名であったが、ローンを返済するために、収穫物のほとんどを民間業者に売らなければならない上、結局は金で米を買うことになる、と言っていた。一般に、伝統村の農民は可能の限り、外部に借金は負わずに農作業を進める傾向にある。また、先述したが、村落内の、店は無利子でローンの貸出をしている。また、現在の当村の様子からすると、銀行に行き、交渉できるまでの知識とノウハウを培う必要もある。このような背景から伝統村の場合は、第一段階として、外部の銀行との取り引きより、婦人銀行が行なっている、「講」に似た制度を発展させる事も必要と思われる。コロボのスラムで始められた、婦人銀行（主催者ナンダシリ・ガマゲ氏）は農村部の婦人たちにも取り入れられて、各地でグループを作り、貯蓄活動を行っている。この、婦人銀行は3年前から、協同組合局と連携した活動を行っている。

#### 3.5.5 普及サービス

農民支援センターに配属している、スリ・ランカ・カシュウナツツ公社の職員と北西部州参加型農村開発計画の職員が村を訪問し、各機関の計画に参加している農民に、普及活動を行っている。その他の普及活動は活発ではない。マハナンネリヤ地区の農民支援センターには、現在、1名の普及員が配属されている。また、農民支援センター配属の農業アニメーターが、各行政村に配属されているが、農業の知識やその他の基本的な訓練が、なされていない為に農民に対する効果的な活動が行なわれていない。十分な訓練をし、農民のファシリテーターとして、活躍できる教育程度（0レベル以上の学歴が在る）や、資質を備えていると観察された。よって、活動に必要な教育、訓練を授ける事により、農民に一番近い、駐在のフィールド・オフィサーとして、将来有用な人材になり得ると考察された。なお、ほとんどのアニメーターは農民の子弟で、出身村が仕事場である。アニメーターと、話し合いを持ったが、その結果は表 3.1 を参照されたい。また、フィールド・ベースでは数名のアニメーターが各機関に配属して、活動している。その一覧は、表 3.2 に示した。

### 3.6 農民組合と水管理

#### 3.6.1 農民組織と水管理の歴史的背景

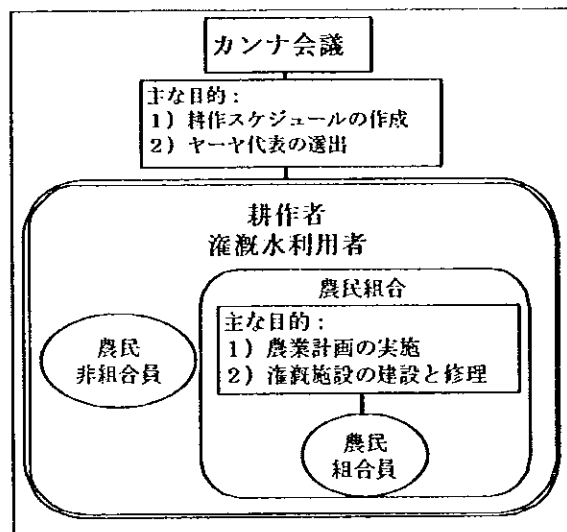
当村の農民組合は農民支援センター職員と協議のもと、1997年に設立された。また、農政法56Aに登録している。しかしながら、農民組合は適切に機能していない。と言うのは、リーダーさえも、組合のあり方について十分な説明や教育を受けていないからである。リーダー達は農民組合をどのように、そして、なぜ登録したのか。また、農民の共同体にとってその、利点や

有益性は何なのかについてを理解していなかった。したがって、いまだに、月例会議は開催されず、また、組合総会はカンナ会議と同日に開催している。また、村の農民は全員、組合員となっているが、会費等は徴収せず、資金もない状況で単に登録を完了した状態である。組織は委員長、副委員長、書記、副書記、会計と委員会委員5名で構成されている。

### 3.6.2 カンナ会議でのヤーヤ代表の任名

ヤーヤ（水田）代表はカンナ会議で任命され、村民には、伝統的な水管理人の呼称である、「ウエル・ウィダーナ」という名で呼ばれている。ヤーヤ代表は灌漑用水及び耕作者の管理を任務としている。当村の貯水池には取水施設が2ヶ所あり、これをヤーヤ代表が管理をしている。このスキームでは、ヤーヤ代表は農民組合の書記としても選出されていた。よって、農民組合が灌漑用水を管理しているように見えるが、灌漑水の管理と耕作計画（作付カレンダー）はカンナ会議により決定され、そして、ヤーヤ代表がこれを管理すし、農民組合とは関係ない。これは、農政法第42条に明記してある。しかし、実際には、農民はこれらのシステムについての知識はない。

ところで、2年前に村の水田を購入した隣村の農民おり、この農民はアーティクラマの農民組合員ではない。しかし、彼らはカンナ会議には出席し、ここで決定した規則ののっとり、農作業、水田施設の維持管理を行なっている。このような状況において、カンナ会議は異なった行政地域に住んでいる耕作者を結びつける機能を持っている。また、組合には女性の会員はいない。スラムダーナ（労働奉仕）は組合が組織し、貯水池堤体の清掃等を行なっているが、このスラムダーナには女性が参加している。



## 3.7 ワークショップ

農民組合の委員長に村落内の住民組織のリーダーと話し合いを行ないたい旨、依頼をしたところ、当日は、40名もの村民が仏教寺院のホールに集まった。このため、ワークショップ形式の話し合いに切り替えることとした。結果は以下のとおりである。

### 3.7.1 問題分析

参集した村民を5グループに分け、現在の問題について各グループで話し合いをした。その後、問題の一覧表を作るために、各グループに紙を配布し、なかでも重要な問題には印をつけた。そして、各グループのリーダーは村民の前で、グループでリストにあげた問題点と、それについての意





見、理由を発表しあった。住民の提出した、全問題については、表 3.3 に示した。リスト作りには、各自が分担して、問題点を紙に書いてリストを作成したが、農村部で、文字を書けない村民が多数居ると危惧したが参集者の中で、年輩の女性 5 名が書けないのみであった。なお、参集者の内訳は、男性 23 名、女性 18 名の 41 名であった。

**楽しい雰囲気でのグループ討論：**

参集者を男女関係無く、ランダムに分けて男女混成のグループを作り話し合いを始めた、しかし、飲酒問題が出始めた頃、女性の意見が男性に抑えられ始めたため、急遽、女性グループを作り、ワークショップを続けた。その結果、女性の活発な意見が出るようになり、また、男性の同意も得るようになった。単なる話し合いではなく、ゲーム感覚を取り入れた形の集まりは、普段は隠している問題も表に現れてくるものであると実感できた。これは、参集した村民も感じ取っていた。しかし、飲酒問題は最後のところで、結局男性に押し切られたような形で、第 7 位、得点は 0 点であった。

**3.7.2 優先問題**

各 6 グループで優先度が高いとして、取り上げた問題

コード	問題
A	飲料水不足
B	作物栽培の灌漑用水不足
C	男性農民のアルコール依存
D	野象による被害
E	電気が無いこと
F	耐久建築家屋がない (が欲しい)
G	雇用機会がないこと



**3.7.3 ペアワイズ・ランキング**

各グループが提出した、優先度が高いとした問題をペアワイズ・ランキングを使って、得点化し、優先順位をつけた。その結果は次のとおりである。

	問題	G	F	E	D	C	B	
A	飲料水不足	A	A	A	A	A	A	6点
B	作物栽培の灌漑用水不足	B	B	B	B	B	B	5点
C	男性農民のアルコール依存	G	F	E	D			0点
D	野象による被害	D	D	D				3点
E	電気が無いこと	E	E					2点
F	耐久建築家屋がない	G						1点
G	雇用機会がないこと							

選択結果

### 3.7.4 ペアワイズ・ランキング得点結果

優先度	問題	点数
1	A) 飲料水不足	6
2	B) 作物栽培の灌漑用水不足	5
3	D) 野象による被害	4
4	E) 電気が無いこと	3
5	G) 雇用機会がないこと	2
6	F) 耐久建築家屋がない	1
7	C) 男性農民のアルコール依存	0

### 3.7.5 過去と現在

村民によって、確認された問題について話し合いを持った。その結果、村民の多くは、調和 (Ekamuthu-Kama)、人間性 (Manussa-Kama)、社会の変化について語った。そこで、過去と現在野相違点は何があるかと言う点について、各グループで話し合いを持った。6グループとも調和と水について、共通に取り上げ、6グループのうち、4グループは農業についての問題を取り上げていた。(表 3.4 参照)

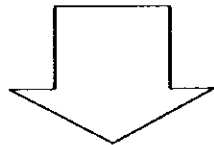
村民は基本的に自給のために下に示した作物を栽培している。しかし、現在ほとんどの栽培を行っていない。ワークショップで村民から以下の理由が挙げられた 1) 灌漑水不足 2) 人口の増加 3) 野象による被害などである。下の、作物栽培暦は、現在と過去で何が変化したかを示している。

コード	品目	作物の種類	主な問題
A	主食	米	灌漑水
B	主食の補完作物 (販売、菓子作り用)	ひえ	チエナ栽培面積の 不足と象による被害
C	豆類	ごま	
D	いも類	ささげ、緑豆、いんげん豆	
E	一般野菜	キャッサバ、さつまいも	象による被害
F	葉物野菜	いんげん、ささげ、とくどへちま、なす オクラ、トマト、へびうり、にがうり	
G	淡水魚	ヨウサイ、ムクヌアンナ (セリ科) ルフア、マグロ、カナヤ (現地名)	泥土の堆積と水不足

**過去**

栽培暦 - 1970年代のアーティクラマ村

月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
コード	← ヤ ラ →			インター・モンスーン				← マ ハ →			インター・モンスーン	
A												
B	■											
C												
D												
E												
F												
G												



- ≡ : 灌漑水による栽培
- ≡ : 天水による栽培
- ≡ : 貯水地の周りに自然に生育している
- : 淡水魚の収穫時期

**現在**

栽培暦 - 1998/99年のアーティクラマ村

月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
コード	← ヤ ラ →			インター・モンスーン				← マ ハ →			インター・モンスーン	
A												
B	⋯											
C												
D												
E												
F												
G												

- ⋯ : 栽培していない
- : 栽培面積の減少

## 第4章 ペーリヤクラマ村



ペーリヤクラマ貯水池

### 4.1 自然

#### 4.1.1 位置

ペーリヤクラマ村は北中部州、アヌラーダプラ県にあり、県庁所在地、アヌラーダプラから南西へ20Kmの所に位置する。村の西方の村落境界線に沿うように、A-9道路（ダンプラ経由キャンディー-ジャフナ道路）が走っている。郡はティラッパネである。

#### 4.1.2 植生と地形

村は緩やかに起伏した平坦な地形である。貯水池、居住地、耕作地は森林と低木の雑木林に囲まれている。また、村の北西部の村落境界線付近には政府の管理するチーク林のプランテーションがある。

#### 4.1.3 気候

ペーリヤクラマの気候は乾燥地帯の降雨パターンと同じである。モンスーンとモンスーンの間である10月から12月が最も確実に降雨量がある時で、マハ期の耕作や灌漑水の貯水に有効である。これ以外には、ヤラ期の3月から5月初め頃に少量の降雨がある。5月から9月にかけて、南西モンスーンがあり、これは、乾燥地帯には降雨をもたらさない。月の平均気温は25℃から29℃である。

### 4.2 人口、世帯

ペーリヤクラマは伝統村で、人口は約1,000、世帯数は約175から185である。総世帯の90%は代々村の在住者で、残りの10%は移転してきた世帯で主にA-9道路沿いに居住している。また、10~15世帯は政府公有地に不法居住者している。村民の全てがシンハラ人で仏教徒である。

## 4.3 農村地域の社会基盤

### 4.3.1 コミュニケーションと交通

簡易郵便局が A-9 道路と村落内幹線道路の交差点にあるが、電話サービスはない。バス停はこの、郵便局の前にある。ほとんどの村民は村から、3.5Km 離れた、マラダンカダワラ町にある民間郵便局の電話を使用している。ここには、国際電話もかけることができる。キャンディー-ジャフナ幹線道路 (A-9) は、北はアヌラーダプラ町、南はマラダンカダワラ、キャキラワ、ダンブツラの各町とを結んでいる。この A-9 道路はアヌラーダプラとコロンボを結んでいる幹線道路であるため、キャキラワ町で多くのバスを利用できる。村落内の道路は未舗装である。そして、この道路はブドククラマ、マナッククラマ、カランベガマの各村へと通じている。

### 4.3.2 灌漑施設

ペーリヤクラマ貯水池の水で全ての耕作用の灌漑水をまかなっている。タンクには 2 個の取水口と 1 個の放流工があり、灌漑水は取水口から 2 本の水路で、水田へと流される。水路には大きな古い大きな堰があり (右写真参照)、ここで水路より高い水田へ水を流す仕組みになっている。水管理は「ヴェル・ヴィダーナ」(本来の役名はヤーヤ代表 - 村民は水管理人の伝統的な呼び方をいまだに使用している) が行なっている。この水管理人には「サラリス」が支払われている。(収穫の 0.5 ブッシェル/エーカー 約 10Kg の初を手当として、水管理人に各農民が支払う) これは現在、10Kg から 20Kg に増やしている所が多いようである。また、収集した初の半分量は貯水池、灌漑施設の管理に使用するところもある。これまで、伝統村の貯水池は、村民の労働奉仕により、乾期に、池底の泥土を浚渫したりくシンハラ語で浚渫を「カッティ・キャピーマ」と言う>して、維持管理されてきた。また、各農民は水田面積に応じて浚渫説をする分担面積が決まっていた。



旧来の堰と農民組合代表者 - ペーリヤクラマ

### 4.3.3 道路

村の中を未舗装の幹線道路が村を横切っているが、その一部は貯水池の堤体である。整備されていないものの一つに、村のなかの支線道路で、特に水田への農道を農民は強調していた。農道は農業資材や農業生産物の搬入、搬出に利用されている。現在、4 輪トラクターの利用できる、水田に通じる農道は村の北はずれにある、一本のみである。

### 4.3.4 電 気

電気は 1991 年村に引かれ、現在は 7 割の世帯が取得している。毎月の電気料金は、100 ルピーから 300 ルピーである。これに対し、コロンボでエアコンを使用している家庭の電気代は、3,000 ルピーから 5,000 ルピーであった。

#### 4.3.5 給 水

水道設備はなく、飲料水は井戸を利用している。一般に乾季は、井戸水の塩分或いは、カルシウム分が多くなり、この期間に、飲用に適した水を得られるのは、村の中で3カ所の井戸のみである。これは、前述した、アーッティクラマと同じ状況を示している。乾燥地域の水問題は、水量でなく水質に問題がある。また、村落で、飲料に適した水の在る井戸のほとんどが、貯水池の下方向にあり、タンクの伏流水ではないかと考察される。



水浴び、水汲みに行く親子

#### 4.3.6 教育サービス

上級中等学校がペーリヤクラマ村にあり、数名の生徒はアヌラーダブラとキャキラークにある中央高等学校に通っている。ペーリヤクラマ校の教師は昇級国家試験に向けて、補修授業を無料で行なっている。村落内には民間の塾はない。また、就業前教育施設（幼稚園）は一つ所ある。

#### 4.3.7 医療サービス

ペーリヤクラマ村と行政村域内には、医療施設はない。政府関連の医療施設はティラッパネに施薬所、マラダンカダワラに診療所、キャキラークに地域総合病院、アヌラーダブラに中央総合病院があり、どれも、A-9道路沿いにあるため村民にとって交通の便が良い。また、町には、多くの医師が開業しているが政府の医療施設のように無料ではないために、緊急時以外はあまり、利用していない。

#### 4.3.8 その他の施設

仏教寺院と僧侶のための学校が（ピリヴェナ）がある。現在50名の僧侶が在籍している。年齢は10歳から16歳くらいで、寺院内には、寄宿舎、教室、図書館がある。図書館には300冊程の英語、シンハラ語、パーリー語の蔵書があり、近在の学生や若者も利用できる。ここに在籍する僧侶の多くは、近隣村の農家の子弟である。



今日の授業は終わった。さて……

村落内の主な施設

項 目		公共	民間	項 目		公共	民間
1	仏教寺院	1		7	精米所		3
2	僧侶学校	1		8	製粉所		2
3	学校	1		9	耕運機		4
4	幼稚園		1	10	自動車		4
5	簡易郵便局	1		11	農業用井戸		2
	農民センター	1		12	バス停		1
6	公民館	1			NGO農場 (25エーカー)		1

#### 4.4 実施終了及び実施中のプロジェクト

##### 4.4.1 実施終了プロジェクト

貯水池の改修工事やその他の大規模な計画は行なわれていない。進行中のプログラムとしては、NGOが1996年から婦人に対して活動を行なっているものがある。

##### 4.4.2 実施中のプロジェクト

###### スリランカ南アジアパートナーシップ (SAPSRI)

1979年にオランダの資金により25エーカーの農場が建設され、NGOにより約10年間、婦人を中心とした農民への訓練を行なってきた経緯がある。しかし、駐在の管理者がいなくなった後、放棄されていたが、1996年にSAPSRIが、当農場を引き受け、農業実習型の訓練を開始した。現場での技術指導者は、いないが、コロンボから組織運営、資金面での支援を行なっている。毎月、コロンボ



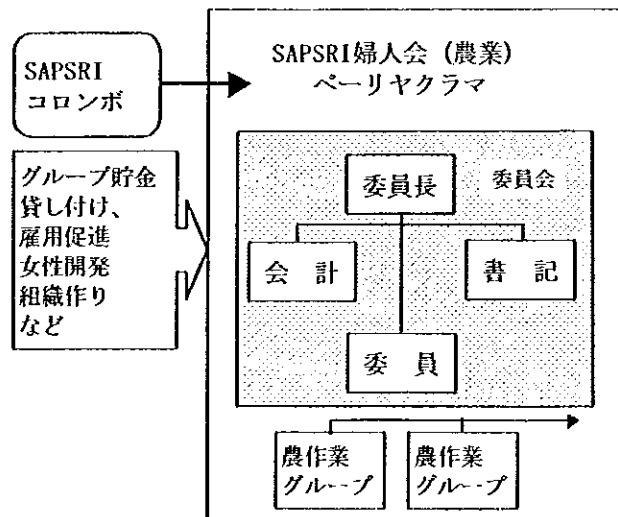
水がないと、土は固くて…、NGO農場

からNGO職員が来訪するが農業の技術、知識は持っていない。このため、何を栽培、飼育するかは全て、会員が話し合って決定する。現在、ペーリヤクラマ村、14名の婦人が婦人組織を作っている。現在、栽培している作物は唐辛子、赤タマネギである。14名の婦人のうち、9名はSAPSRI企業開発スキームのクレジットを借り、この内、6名の女性は養鶏を開始しようとしている。鶏舎は既に建設し、50,000ルピーを借りる予定になっている。ローンの利子は1.7%/月で返済期間は1年である。他の3名は、ローンを借りて、たまねぎ栽培を行なっている。タマネギの栽培技術指導は、タマネギの産地ダンブツラから、この村に嫁いできた会員女性が行なっている。また、婦人会の承認があれば、男性も農場内の圃場を借り、栽培が可能である。現在2名の男性がたまねぎ、とうがらしの栽培を行なっている。農場内の施設は、農業用井戸 - 1、畑地 - 20エーカー、事務所 - 1棟、養鶏小屋 - 1棟、給水タンク - 1である。

#### 4.5 村落共同体の現況

##### 4.5.1 歴史的な背景

ペーリヤクラマは伝統村である。村名の由来は貯水池にあり、ペーリヤクラマは「大きな池」と言う意味である。また、クラマはタミル語で池の事を意味する。現在、数家族のみが旧「ガンゴダ」(居住地/集落)に居住している。その理由は、1957年に乾燥地帯を大洪水が襲い、その時、ペーリヤクラマ貯水池も被害を受けたためである。貯水池の堤体は2ヶ



所が破れ、「ガンゴダ」も被害を受けた。しかし、寺と村民は害をまぬがれ、死者もでなかった。そして、この時から、「ガンゴダ」に住む家族が少なくなった。老人達は今も、この破壊的な洪水を覚えていて、神仏のおかげで皆無事だったと信じている。

#### 4.5.2 文化と行事

古い時代の自然や物的な特色は見ることは出来ないが、文化的な活動や儀式は今日でも、まだ、見ることができる。村民の神に対する信頼は大変強く、いまだに、神は自然の災害や病から彼らを加護してくれるものと、神に祈りを捧げ続けている。当地には、次の3つの伝統的な儀式がある。



ボソソ・ウェサック (仏教伝来を祝う)

第1の儀式は「ムッティ・マンガラヤ」と言い、「アイヤナヤケ神」に対して尊敬する気持ちを表し、第2番目のものは、「キリ・リティリメ・マンガラヤ」と言って、前年の神の加護と収穫の恵みに対して、牛乳を「エヘトウ」の木の下で沸かす。最後に、「マハ・ダーナ」と言い、神に村と村民の加護を依頼する。これらの儀式には全ての村民が出席しそして、調理には、魚や肉は一切使用しない。特に、村民は病気からの加護を望んでいる。そして、この3つの儀式に加えて、「ヴィシュヌ・マンガラヤ」は「ヴィシュヌ神」に敬意を表し、毎年行なわれる。

伝統的に、農民と貯水池は互いに密接な関係があり、数々の宗教儀式が行なわれ、いくつかは、現在に継承されている。儀式の意義は、神々への感謝と加護、将来の神の恵みに祈願する事である。儀式の中でも、一般的なものは現在でも行なわれている。それらは、「ムッティ・マンガラヤ」(Mutti Mangalya)、「キリイティリメ・マンガラヤ」(Kiri Ithirime Mangalya)、「マハ・ダーネ」(Maha Dane)である。これらの儀式は貯水池の堤体にある、「エヘトウ」の樹の下で行なわれる。どの儀式においても、肉や魚は用いられない。主として、神々が与えた加護に対する感謝の念である。また、ヒンドゥーの神「ヴィシュヌ」に対して、「ヴィシュヌ・マンガラヤ」の儀式もある。

#### 4.5.3 伝統的農作業

「アックン」(労働交換)、「カイヤ」(共同作業)、「ムッテトウ」(圃場で参加者が共に取る食事)と言った伝統的農作業は以前ほど頻繁に行なわれていないが、実行されている。また、古くから脱穀場(カマタ)で行なわれていた儀式は、現在もなお、続けられている。しかし、脱穀場で牛を利用する代わりに、農業機械-トラクター、脱穀機-を使うようになって、少しずつ消滅している。

#### 4.5.4 主な工業

村落内には3軒の精米所と2軒の製粉所以外には特に工業はない。村から北へA-9道路で6Kmのティラッパネに衣料縫製工場がある。



#### 4.5.5 住民の暮らし方

概して、村民は質素で、素朴な生活を望んでいる（これを、質的に高い暮らしであると考えている）。彼らの要望は少なく、向上心も限られている。しかし、現在の農村の生活は外部の影響を強く受け、村民の考え方や慣習は変化し始めている。

##### 結婚と出産

結婚式は質素で親戚や友人が一同に会する。結婚式は新婦の家で行なわれる。占星術は重要な役割を担い、結婚式での行事のスケジュールはすべて、占星術により作成される。決められた、吉時間に、「アルター」に登り結婚の儀式は執り行われる。‘結婚の結び（互いの指を糸で結ぶ）’を結び、「アルター」から降りる。この、儀式の後、食事を共にした後、結婚したカップルに年長者がスピーチをする。この後、出生・婚姻・死亡登録官が結婚式場まで出張し、式場で婚姻届を終了する。

##### 初めての子供

初めての子供は「クルドウル・ダルワ」と呼ばれ、親戚中を訪問し面会をする。一般に、男子の出産が喜ばれる。しかし、女子は家族、特に父親に幸運を持って来ると信じられている。一般に、平均 3～4 名の子供がいるが、最近では村落部でも出生数は減少している。特に若い夫婦の間では、2 名が普通である。



初めての子供（ペーリヤクラマ）

##### 病気と死

村で、病気と死は村人をひとつにまとめる、機会でもある。このことから、葬式互助会の人気が高くまた、良く機能しているか、と言う事が理解できるかも知れない。この互助会はいろいろな備品を所有し、会員の葬式の時は下の表に示した、サービスを行なっている。また、互助会で、備えている備品は結婚式や新築祝い等のような集まりにも貸し出されるが、使用料を支払わなければならない。しかし、会員の葬式の時は無料で貸し出され、会の積み立て金から、約 5,000 ルピーの葬儀費用が支給される。互助会の資金は備品の貸出による収入、会費でまかなわれている。入会費は 100 ルピーで毎月の会費は 10 ルピーである。



葬式互助会から、新築祝のパーティーに貸し出された、スチール製のイス。

葬式互助会の設備とサービス

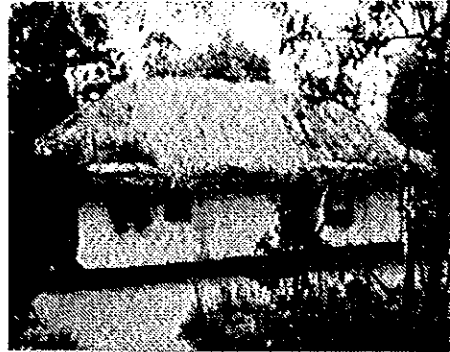
	備品	会員	非会員		備品	会員	非会員
1	テントセット	無料	Rs.500/日	6	葬儀飾り付けセット	無料	無料
2	スチール制イス 30 脚	無料	Rs.3/日/脚	7	葬儀費用	Rs.5,000	無料
3	コップ 50 個	無料	無料		(会員家族)	Rs.4,500	無料
4	大皿 50 個	無料	無料	8	食事のサービス	5 食-3 日間	無料
5	水さしセット	無料	無料				

## アユルヴェーダ 伝統医療と医療

家庭療法、アユルヴェーダ医薬、悪霊払い、これらは村人が病気になったとき、最初に、行なうものである。そして、西洋医療は最後の手段だと考えられてきた。いま、このような、考えは既に変化し、村民のほとんどが、公立の病院に行き、治療を行なっている。しかし、アユルヴェーダ医療は病気の種類によっては、良く利用されている。

### 4.5.6 住 宅

住宅はいろいろなタイプのもが混在している。最近の住宅は、壁にレンガを使用し、屋根は瓦やアスベース・シートを使用しているが、伝統的な作りの家は、壁は土壁、屋根はココナッツの葉や草葺きである。右写真のような伝統的な家は、村に点在している。ほとんどの住宅は持ち家で、約5%が不法に居住している。



伝統的な家・土壁に草葺きの屋根

### 4.5.7 村の女性

一般に、男性が家の世帯主として扱われる。しかし、家庭内での主婦は、尊敬され大切に扱われている。水田やチェナ（焼畑）での仕事には、夫婦で出かけるが仕事を分担している。主婦は、家庭をとりしきり、子供の世話など、家庭内の責任は主婦が負担している。また、女性は宗教的な活動において、重要な役割を果たしている。乾燥地帯の典型的な村の生活は、寺を中心に動いているが、ペーリヤクラマ村の場合、これらがあまり活発ではなかった。そして、多くの一般的な習慣が、男性の習慣的な飲酒で変化しているようである。そして、特に、村の女性にとって、深刻な問題となってきている。

### 4.5.8 主な収入源

元来、村民の主な収入源は農業であった。しかし、これらの、重要な収入源が次第に減少してきている。この原因は、質の悪い種子や水不足により、生産性が落ちた事、次に、野象や鳥類による被害であると指摘している。また、市場・流通設備が無い事も、重大な要因のひとつである。

#### (1) 農業収入

農業生産物の生産低下により、販売用の余剰生産物がなくなり、現金収入が低下している。基本的に、これまでの伝統村の生活は農業活動による、自給自足の生活であった。そして、主食である、米を補完する形で、チェナ（焼畑）耕作が行なわれ、この余剰生産物が現金収入となっていたようである。しかし、人口の増大により、農地の分散縮小が進み、結果的に農業生産性は低下した。また、幹線道路と村の間のチェナ耕作地に人々が住み始め、農業による収入は益々、困難になっている。このような経過をたどり、村の共同資源を管理していた、伝統的な行事やコミュニティーとしての機能が失われつつあり、村における質的な暮らしが低下している。

調査対象地域の農業形態は、自給指向型農業と営利指向型の2つに分けて見ることができる。それぞれの特長を下表に示した。

農業のタイプ	自給指向型農業	営利指向型農業
水田面積	小 (分散している)	大 (1区画)
村のタイプ	伝統村	入植村
貯水池の規模	小～中	中～大
灌漑水の量	不足がち	ほぼ充分
米の収量	低い	平均が高い
稲の栽培期	マハ期のみ	マハ期とヤラ期
稲作の目的	主に自給	自給と販売
稲作におけるリスク	高い傾向にある	低い傾向にある
農業の多様性	マハ期	ヤラ期
米以外の作物及び野菜 (OFC)	主食の補完的意味合いが強い (豆、雑穀類が多い)	販売が第1の目的 (換金性の高い作物)
OFCの栽培地	水田でなく、チェナ	水田が多い傾向にある
信頼できる人間関係	村落内村民、親戚	家族
農業による収益の安定度合い	気候の影響を受けやすく、安定していない	概ね安定している
農業ローン	possibleの限り自己資金でまかなう。借りる時は村落内の親戚関係から	一般に銀行や商売人からの借入金

一般に、自給指向型農業として分けられる、灌漑スキームは伝統村の規模の小さい、スキームである。農業による収入は安定しない為に、常にこれを補完する収益活動が必要である。これまでは、チェナ (焼畑) 耕作が、稲作農業を補完していたが、自然、社会環境の変化から、農業以外の収益活動により補完する必要性が増していると観察された。



二人の若い農民は、収穫したナスをアヌラーダブラに売ろうとして、ペーリヤクヤマ交差点で、バスを待っている。しかし、荷物の多い青年を見て通りすぎて行く。集荷場や販売ルートが確保できると、農業を生業にする若者が増え、共同体の活性化につながるのでは？

## (2) 農外収入

村落内には、村民が働ける産業は少なく、数名の村民が村落内外で定職について収入を得ている。そのほとんどが公務員で、学校教員、警察官、軍人が多い。(以前はこのような公務員経験者が村における、相談役であり、村を代表する役員であった) また、数名の若い女性は、ティラップネ (村から6Km) の衣料縫製工場に勤めている。

しかしながら、多くの貧困層は雇用労働者として、村落内外で日銭を稼いでいる。レンガ生産がヤラ期 (乾期) では、村落内では最も、一般的である。多くの村民が、ヤラ期には、自宅の建築材料として、または、販売目的として、レンガ生産を行うが、これは、一般に、契約生産方式がとられる。レンガ作りのための材料は、発注者から提供されるが、ほとんどの材料は、自宅敷地で、無料で手に入るものがほとんどである。レンガ焼きの燃料は、薪や初穀を使用している。村落内及び、村近辺での雇用労働と賃金を下表に示した。

No	労働の種類	男性 (単位:ルピー)	労働の単位
1	稲作-日雇い	175~200 + 茶・昼食付	01 日
2	大工	300~325 + 茶・昼食付	01 日
3	左官	300~325 + 茶・昼食付	01 日
4	技術職の補助員	150~175 + 茶・昼食付	01 日
5	レンガ型作り	250~300 + 茶・昼食付	レンガ 1,000 個
6	レンガ焼き	175~200 + 茶・昼食付	01 日
7	道路工事人夫	150	01 日
No.	労働の種類	女性 (単位:ルピー)	労働の単位
1	畑作-日雇い	125~150 + 茶・昼食付	01 日
2	レンガ型作り	250~300 + 茶・昼食付	レンガ 1,000 個
3	道路工事人夫	150	日

#### 4.5.9 住民組織

村には下表の 5 つの住民組織が存在する。

1	農民組合	4	葬式互助会
2	SAPSRI 婦人会	5	仏教婦人会
3	青年クラブ		

##### (1) 農民組合

農民組合は、1992 年に設立され、会員は 50 名である。村内の農家世帯数は 147 であり、約 3 割の世帯が農民組合会員ということになる。農民組織の主な活動は、農業と灌漑関連の活動である。農民組合リーダーは農民組織の目的は、①カンナ会議への出席、②灌漑システムの維持管理、③農民支援センターを通じて、農業生産資材を準備する事であるとしている。しかし、この灌漑システムは中規模であるが、管理は小規模と同じ管理システムであった。

##### (2) SAPSRI 婦人会

NGO - スリランカ・南アジア・パートナーシップの協力で、14 名の女性による、婦人会が機能していた。この会の目的は女性の地位向上と農業活動による経済的發展である。(4.5-(1)参照)

##### (3) 青年クラブ

国家青年奉仕評議会 (NYSC) の傘下にある、青年クラブが 34 名 (女性 17 名、男性 17 名) の会員により設立されていた。なお、会員の年齢は 18 歳から 35 歳と幅があった。現在行なっている活動は、スラムダグーナ (労働奉仕) による公共施設の清掃、修理が主で、貯水池の水浴び場、運動場、コミュニティーホールなどを対象に行なっている。この他に、NYSC が資金を提供して、3 カ月のタイプ訓練を村内のコミュニティーホールで行なっている。現在、ペーリヤクラマ近郊の村から、10 名 (女性 6 名、男性 4 名) が集まり訓練を行なっているが、当青年クラブは近郊 5 か村の中核センターとなっている。また、青年クラブは、「ボヤ」(満月) の日に村の寺で「ボーディ・プージャ」(菩提樹への奉納) を準備する。なお、NYSC では、雇用促進のため、日本の職業安定所を模倣して作った、職業案内サービスを各県事務所、コロombo事務所に設置

している。昨年度は、スリ・ランカ全国で4,000人の青年男女に職業紹介を行なっている。

#### (4) 仏教婦人会

クラガナ・サミティヤ（仏教婦人会）が、寺で設立されているが、主に寺への奉仕活動と村落内の宗教活動の準備等を行なっている。

### 4.6 農 業

#### 4.6.1 農 地

農民によると、全農地面積は280エーカー（112ha）であり、その他に、約120エーカーの「アッカラウエラ」（植民地政府が、公有地を開墾した村民に売り渡した土地で、一般に水利権がない）があるが、不法に取水し、耕作している。土地の保有は1世帯当り、0.5エーカーから2エーカーと変動が大きい。また、元農民組合役員から現存の古代の水路を改修する事により、水の有効利用を可能にし、このアッカラウエラを水田として活用する提案があった。

#### 4.6.2 稲作、OFC栽培及び畜産

##### (1) 稲作及びOFC栽培

稲作が主な灌漑水により栽培される作物である。収量は、概して低く、マハ期に、約70ブッシェル/エーカー（3.5t/ha）であり、ヤラ期は60ブッシェル/エーカー（3.0t/ha）である。米以外の作物は、主に自家用としてチェナで栽培され、余剰生産物を販売している。栽培品目は、トウモロコシ、ささげ、とうがらし、しこく稗、緑豆、けつるあずき、ごまで、降雨を利用して栽培される。トウモロコシとささげは主に自給用に栽培される。各農家は1から2エーカーのチェナ地を持っている。チェナ耕作は年々減少しているが、ヤラ期のOFC栽培は水田で行なっていない。農民によると、水田でのOFC栽培は、排水が悪く、雨が1度降ると浸水して、枯死してしまうため栽培しないと言う意見であった。しかし、聞き取り結果からすると、畝の高さは畑地とほぼ同じで、15cm位の高さしかない状態で作っていると考えられる。ヤラ期に、水量を確保できない水田では、4月から5月の降雨に期待をかけた、稲の「キヤクラン」（乾田直播）栽培を行なっているが、これはリスクが大きい栽培方法で収量は非常に低い。よって、キヤクランを行なっているような水田における、OFC栽培は、畝のたて方や栽培品種の選定など基本的な技術の改善により、OFC栽培可能地に変更が可能と考えられる。

##### (2) 畜産（緊急時の保障としての牛）

村落内には約150頭の牛が飼われているが、誰も、定期的に収入を得ていなかった。この理由を、農民に質問すると、「ウワマナー・ナー」と言う返事ばかりである。意味は、収入を得ようとする「必要性がない」、「やる気がない」と言うことである。理由は、



牛による交通渋滞

牛の持ち主のほとんどが、村落内では裕福な方で、牛は収入の手段ではなく、財産として扱っているということである。それは、また、牛は緊急時に備えた、保障のひとつであると考えられる。実際、結婚式や葬式、入院などの緊急時に販売し、現金を得ているということであった。ペーリヤクラマ近辺は、牛乳集荷業者が牛乳を集荷している地点の中間にあり、実際隣村にはミルク缶が、牛乳集荷のため、トラックで毎日来ている。アヌラーダブラ、キャキラークに牛乳集荷場があり、立地条件は非常に恵まれた所に位置している。

#### 4.6.3 農業における問題

農民組合の新旧役員と、農業問題について話し合いの場を持った。この話し合いの結果を要約すると以下のとおりである。また、これらの事は他の、村落部にも共通する事である。

- a) 農業生産資材の高騰と
- b) 農業生産物の低価格（庭先販売価格の低下、実質収入の低下）
- c) 流通設備、施設、手段が近在にない
- d) これらに加えて、野象による、作物への被害
- e) また、チェナ耕作の減少による、現金収入が低下したうえ、主食の補完作物の栽培が不可能な為、出費が以前よりも増大している。
- f) 旧来の灌漑施設（土水路と大きな堰）のため、灌漑用水の有効利用が不可能なうえ、維持管理がなされない
- g) 農民組合に、住民の関心が低くスラムダーナ（労働奉仕）を呼びかけても住民が以前のように集まらない為、共有（農業）資源 - 貯水地、村落に道路などの管理が難しい。
- h) つまり、農民（住民）相互の調和、規範の低下
- i) 普及員による指導を必要な時期に得られない。

以上の9点に要約する事ができる。